

国士館の思い出

思い出の記

旧制国士館中学校一六期生

古上 敦利



平成二六年五月の或る晴れ渡った長閑な日、ペダルは懐かしの松陰神社へと向かっていった。井伊直弼が祀られ、招き猫で名を馳せる豪徳寺を左に見ながら、宇佐八幡の交差点を抜け、なだらかな坂を、腰を持ち上げながら漕ぎ終ると、世田谷の行政庁が左右に広がる十字路にぶつかる事になる。左折して直進すれば母校国士館の校舎とグラウンドを分ける梅ヶ丘へ通じる道路が走っている。

母校の東端まで一応走らせて見て、逆戻りして期待感を胸に抱きつつ世田谷区役所前の国士館史資料室の事務室を訪れた。そして、旧制中学一六期生の卒業アルバム閲覧を願い出て、当時の存在を明かすべく、しばし昔を偲び会話を進めていった。

すると、対応に当たった職員の方より、そうした当時の話を執筆してほしいとの依頼をうけた。そこで御要望により愚作を顧みず、願い出をお請けすることにした。

過ぎ去りし昭和一八年二月の真冬の或る日、オーバーの襟を立てながら、世界大戦に突入した我が国への責任を如何にすべきかを、小さいなりに思いを走らせながら母校の校内を後にしたのである。ここで私の家庭と国士館へ入学する事となった当時の思いを振り返ってみたいと思う。

入学に際しては、叔父・叔母の世話になる事となった。入学式当日は、叔父・叔母に迷惑をかけまいと、一人で赴いたが、当時は小学校と異なり、都内二三区、神奈川地区等出身学校は多数で、絞りの着物に下駄ばき姿やお坊っちゃま姿の白襟スタイル等様々で、私は叔父・叔母が、かつて裁判所の公務員出身と言う事で、質素な身成りで恐る恐る入学式に参加した記憶がある。

ただ自分は、小学校時代の同級生が数人おり、登校には何時も自宅前を通る同級生の呼びかけがある賑やかな

日々と、下校時も互いに約束事で待ち合わせをしながら楽しい毎日を送っていた様な記憶がある。

低学年時代に忘れられない事は、決められた校服の襟章を付ける所がほころび、補修を迫られた際に、叔母が全く異なる切れ地で補修し、甚だ嫌な思いをした事である。子供なりの思いもあり、何んとも重苦しく、世話になっている立場でもあり、つくづくと実の母親であったら我儘の一つも言えたらうになあと、居候の心苦しさを深く味ったものである。

それから今でも忘れられない事は、当時、武道が柔、剣道の何れかを選択せねばならず、居候の身では、金銭的な事が直ぐ頭に浮かぶのであり、剣道具より柔道着の方が費用的に安いので、柔道を選択した次第であった。柴田館長は著名な方々をお招きする事に長けておられ、頭山満翁、駕陽の宮様等をお招きされ、閥兵分列行進を行い、生徒等の指導を鼓舞されていた様である。

当時は教練というものが義務付けられ、陸軍の特務曹長、少尉佐官級の軍人が配属将校として配置され、館長に次ぐ権威を維持していた様である。

大東亜戦争の開幕は、昭和十六年二月八日未明の真珠湾攻撃に始まったのであるが、確か翌年四月頃であったろうか、学校の校庭で休み時間に何かを楽しんでいた

時の事であろう、米国のコンソリデートド P B Y カタリナと言う双胴の飛行機が母校内庭の上空に現れたことがあり、これが初めての外国機侵入であった事を今でも記憶している。

また、年一回行われている運動会には、現在のグラウンドで紅白に分かれた先輩等が大きな太鼓を講堂から持ち出し、力一杯たたいていた姿や第一高等学校の替え歌を歌っていた様が、今も脳裏に浮かぶようである。

また、寒稽古の柔剣道は、ともに専門学校の学生と合同で行われたため、事前に仲の良い友達と誘い合わせ、空気が投げと言う恐ろしい技をもつ専門学校生からの誘いを逃れていた様な記憶がある。そう言えば卒業前の何時かは忘れたが、当事靖国神社の横にあった府立九中で、友人と二人で一本とれば柔道の初段が貰えると言う事で早速出掛け、試合に臨んだ事がある。相手は自分が左利きである事を知らなかったことから、一挙に左の大外刈りが効を奏し、見事一本を取ったが、如何言う仕組か、何の賞状もなく、ただ初段を貰った事の嬉しさのみが残る不思議な出来事であった。

九段と言えば、当時自分は器械体操部に属しており、ターザンと言うあだ名の付く大野光起先生の元で鉄棒にしがみついていた時期がある。何の指導もないままに東

京都の中学器械体操の大会に四、五人で参加した記憶があるが、言うまでもなく初回で落選の浮き目に会った。

しかし一方、詩吟については、木村岳風先生と言う立派な恩師に仕え、九段の軍人会館にて、同学年全員、三組約百数十名で岩崎行親作の「国体篇」を合吟した事もあった。当時としては未曾有の出来事ではなかったろうか。

我が国は、年を増すごとに戦火は拡がるばかりで、吾々の教練も軍隊のそれに近づいて行つた様に思える。従つて、或る時は二泊三日の舍営訓練、或る時は習志野に、或る時は富士の裾野と、日本陸軍に習つた実践そのものの様であった。

また、勤勞奉仕と言う名の元で、出征兵士の農家の畠へ草むしりに行つたり、板橋方面の某歩兵工廠と名の付く陸軍の工場に小銃の箱詰めに行つたり、戦況はわからぬまま、殆んど勉強は行われず、勤勞奉仕と言う美名のもとに作業をさせられた学生生活であつた様に思える。

また、同級生の中には大変度の過ぎたいたずら好きの者がいて、卒業時の五年の頃は、隣の世田谷区役所との間のアカシヤ並木の葉に、大きな緑色の芋虫が付着しており、それをわざわざ手で取り、同級生の筆箱にそつとしのばせ、開けてびっくりする様を喜ぶなどして、な



学友たちと共に（右端が筆者）

やませられた事もあった。また、物理担当の村岡松太郎と言う先生がいらしたが、なぜかあだ名が「怪物」であり、机の側を通ると皆本を立て掛け、かくれる様に顔を伏せていたものだった。

学校を卒業後、大学への進学も自信がなく、これ以上叔父たちに迷惑はかけられぬと、早速に門をたたいたのが海軍省兵備局第三課である。そこで、所属の船舶応急処理委員会という少人数の部屋に配属され、社会人としての第一歩が始まったのである。

編成は海軍少将を特攻部長として、海軍大佐、主計大尉、海軍兵曹、タイピスト、給仕と吾々中学校出身の男女各一名といったメンバーであったが、当時の文書はすべて軍極秘のスタンプが押され、各局部に持ち回りされたものであるが、忘れ得ない事件が今でも脳裏を離れないことがある。それは当時、ジャカルタ、シンガポール、スラバヤ、香港等々に私と同年代の女性タイピスト数十名が採用され、当時名だたる病院船「那智山丸」に乗船し、送り届ける途中、日本海で敵からの魚雷を受け、沈没したとの情報を受けたものの、その後の情報は何も入らず、ただただ痛ましい思いで秘密主義の方針に従わざるを得なかったことである。

反面、物資面の支給については陸軍と対照的で、民間

では得られない物が結構手に入った様な気がする。

例えば、民間に出回っていたどす黒いコッペパンに比べ、中身は陸軍とは比べものに成らないふんわりとしたすばらしいパンが得られた。

砂糖についても、民間では赤黒い沖縄産の黒砂糖であったが、海軍省では真白い白砂糖を十分に使っていたらしい。

それと忘れられない出来事と言えば、昼休みは丸々一時間あるので、同僚と東側に当る日比谷公園に遊びに行った事があるが、たまたま僅か一分くらいと思うが、遅れて海軍省内に入った折、海軍兵学校出身である副官の眼に止まり、「貴様等は軍法会議に付するぞ」と異様な気概でおどされた事が記憶に残っている。

そう言えば、「上官の命令は朕が命令と心得よ」と言う言葉が耳の奥底に残っている様な気がする。「朕」で思い出したが、黒表紙の軍人勅諭と言う本を持たされ、暗記をさせられたものだ。中身を簡単に披露すれば、「一、忠節を尽くすを本分とすべし、二、礼儀を正しくすべし、三、武勇を尚ぶべし、四、信義を重んずべし、五、質素を旨とすべし」という五ヶ条であった様に思う。その前段には、「我國の軍隊は、世々天皇の統率し給う所にぞある」で始まり、「昔神武天皇躬づから大伴物部の

兵どもを率い、中国のまつろはぬものどもを討ち平げ給い、高御座に即かせられて、天下しろしめし給いしより、二千五百余年を経ぬ」云々と記されていた。教練の必須科目ではあったが、意味の分からぬままの、坊主の論語読みの論語知らずと言った所であろう。

また当時は、日独伊三国同盟とやらで、ドイツではヒットラーユーゲントと言って、現在で言うボーイスカウトの様なものがあつた。

私共の長男も、小学校三年の二学期が始まる九月に、カブスカウトと言うボーイスカウトの小学生部門に入つた。ボーイスカウトは、イギリスの軍人口バート・ペーデン・パウエルによつて考案された健やかな子供を育成する世界的な運動であり、課外活動の一環として日本にも入つてきた。当時、千歳船橋在住の私共にとつては、熱心な親子さんたち、即ち中学校の校長、文藝春秋の課長、税理士、薬業界の社長等、そうそうたる人物が寄り集まり、世田谷地区第一三三団を初めて結成し、ボランティア活動を始めた訳であるが、自分にはちやうど適任男児が一人居合わせたので、早速委員に押し付けられ、奉仕活動と言う美名のもとに団の運営を負われる身となった。

早速に伊勢丹に向き、帽子、スカーフ、下服、靴等

一切を揃え、一応外観だけは整えたものの、中身が十分のため、その後、相模湖畔で催された世田谷地区の指導者講習会に参加することを余儀なくされたが、その研修たるや、民家の一軒家にせんべい布団のお粗末待遇、加えて枕元へは一二センチ程もあろうか、大きな毛虫が這い回る状況で、何とも寝れぬ、いやな講習会であつた。今でも思い出される事は、在学中、柴田梵天先生が「人生意気に感じねばならない」といわれた言葉が、なぜか生活に息づいている様でならない。

戦後何と言つても食糧難であつたゆえ、叔父の勧めで世田谷通りの一隅に食料品店を開業する事となつた。叔母も大切な着物をタンスから一枚ずつ引出してはお米に代えていた様であつた。また当時は、一升びんに玄米のお米を入れて棒で突き詰めながら白米に仕上げていくのが日課であつた。また営業日もままならぬ状態であつたので、小さなたばこの巻紙紙にたばこを巻く、今で言うアルバイトも行った。しかし、その処分も出来かねず、姪の連れ合いに、勤め先の会社で換金方をお願いしていた始末であつた。

また当時思い出されるのは、食糧不足のため何でも口にしたことである。叔父は、世田谷の上町から数分歩いた所にあつた赤土で埋め立てられた東急の分譲地二区画

約百十坪の土地を二〇年賦で取得し、その支払いを私に追いかぶされた様で、何とも居候とは言え、身の置き所に困ったものである。

国士館中学校の在学中には、放課後は校内の畑で切れの悪い鋤を持たされ、満蒙開拓団にも似た日々を送った。時々同級生が放課後体育でそばの道路を走っていた時もあり、何とも解せない日々が過ぎて行った様でならない。戦後とは言え、叔父は此の地で「八雲肥培素」なる名称で、肥しを販売していたが、一袋いくらかも想像出来ない状態であった。

また、この土地一杯に、三軒茶屋の四戸建ての建物から出た人糞を、かつて裁判関係で面倒をみた世田谷区用賀の百姓さんより、リヤカー、肥桶を借り受け運び出した。これを上町の分譲地の敷地一杯に振りまき、天日によって干し上げ、袋詰めにして処分していたらしい。また、こうした時代ゆえに、ありとあらゆる作物を作ったのは当然であり、とうもろこし、薩摩芋、里芋、葱等、数え切れぬ程であった事を忘れ得ない。忘れ得ぬと言えば、叔母の里芋の料理の方法である。芋には赤芽と青芽の二種類の芽があるが、叔母には面倒であったのであろうか、その皮をむかずに、そのままおつゆに投げ込んだのであろう。喉がいがらっぽくて不愉快極まりなく、叔

母は文句を言うなとばかりに含み込ませていたのであった。

叔母は小町美人と言われ、体こそ小さくはあったが、中々の美貌の持主で、当時同級生からも評判が良かった様である。

私は、昨年一月に米寿の祝いを迎えた。新宿センタービルでの祝儀の宴はまだ久しくない。今は、東京にやがて来るであろう二回目のオリンピック開催を心待ちにしつつ、この辺で思い出の記を終わる事にしたいと思う。

最後に、我が母校の益々の発展を心に念じつつ筆を置く事と致します。